

29

氏 名	平塚 ゆかり
学 位 の 種 類	博士（異文化コミュニケーション学）
報 告 番 号	甲第405号
学位授与年月日	2015年3月31日
学位授与の要件	学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号） 第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	日中通訳者の通訳規範意識とその形成要因
審 査 委 員	（主査）鳥飼 玖美子 武田 珂代子 楊 承淑（台湾輔仁大学跨文化研究所教授兼所長）

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

- 第1章 序
- 第2章 先行研究
- 第3章 中国における通訳史と通訳翻訳「規範（規範）」
- 第4章 近現代中国における通訳者の規範論－時代考証と言説分析
- 第5章 言説から見る現代日中通訳者の規範意識
- 第6章 考察
- 第7章 結論

(2) 論文の内容要旨

本論は、中国語・日本語を使用言語とする通訳者の規範意識をオーラルヒストリーという方法論を用いて検証した研究である。

本論の前半では、中国の通訳における歴史と、中国というコンテキストにより産出された通訳翻訳論を時系列的に概観し、次に、近現代の中国外交に携わった通訳者の論を例に、規範意識とその形成要因を検証し、これまでの中国における通訳規範を検証した。後半では、現代の日中通訳者のオーラルヒストリーを分析することで、前半の文献研究により導きだされた中国の通訳規範と、現代の通訳者の持つ規範意識との関連性など、日中通訳者の実践に基づく規範意識から、その形成要因、そして通訳を取り巻く社会的コンテキストと規範意識の関係を考察した。

本論の理論的枠組みとなる王(2013)は、Chesterman (1997) の規範論を援用し、欧州の通訳者倫理規定や中国国家基準「口译规范 (通訳規範)」などの通訳者の職業倫理規定を分析し、そこから抽出した規範概念を「規定性規範」と名付けた。そして外交通訳者の実際の通訳スクリプトと「規定性規範」の間に存在するシフト（ずれ）から通訳者の「実際の規範」を抽出し、両者を比較分析した研究である。本論ではこの王 (2013) に依拠し、「規定性規範」を中国における通訳翻訳論および通訳者の言説から抽出し、オーラルヒストリーに現れた現役通訳者に内在する規範意識である「実際の規範」との比較検証を行なった。中国語母語話者の規範意識には、これまでの中国通訳規範や「忠実」が「規定性規範」となって意識の上で現れていることが伺えたが、「実際の規範」とは乖離が認められ、コミュニケーションを円滑にするという意識がより優位となり訳出行為に現れる可能性が結果として示された。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文は、中国語・日本語を使用言語とする通訳者の規範意識を、歴史学／社会学分野のオーラルヒストリー手法を用い、日中通訳者へのライフストーリー・インタビューをデータとして分析した研究である。

論文の前半では、中国における通訳の歴史をたどり、中国というコンテキストの中で生み出された通訳翻訳論を時系列的に概観している。次に、近現代の中国外交に携わった通訳者による通訳論を例として取り上げ、通訳に関する規範意識とその形成要因を分析している。

理論的枠組みとしては、王(2013)の規範論を用いている。王(2013)は、Chesterman (1997) の規範論を援用し、欧州の通訳者倫理規定、中国国家基準「口译规范（通訳規範）」などにおける通訳者の職業倫理規定を分析し、そこから抽出した規範概念を「規定性規範」と名付けた。本論文では、「規定性規範」を中国における通訳翻訳論および通訳者の言説から抽出し、ライフストーリー・インタビューに現れた、現役通訳者に内在する規範意識である「実際の規範」との比較検証を行なっている。

論文の後半では、現代の日本語—中国語通訳者のライフストーリー・インタビューを分析することで、前半の文献研究により導きだされた中国の通訳規範と、現代の通訳者が持つ規範意識との関連性を検討している。中国語母語話者の規範意識には、これまでの中国通訳規範や「忠実性」が「規定性規範」となって意識の上で現れていることが判明したが、「実際の規範」とは乖離が認められ、コミュニケーションを円滑にするという意識がより優位となり訳出行為に現れる可能性が結果として示された。

さらに分析からは、中国語母語話者の「忠実」の対象は人であり、日本語母語話者の「忠実」の対象は言語であることが推論されている。また、通訳経験の最も長い日本人通訳者と、日本で訓練を受けた経験の浅い中国人通訳者には、それぞれ他の母語話者とは異なる規範意識の傾向性などがみられた点が指摘されている。

結論として、日中通訳者の語りから、中国語を母語とする通訳者と日本語を母語とする通訳者とでは通訳行為における規範意識が異なること、通訳者の規範意識と実際の通訳行為にシフト（ずれ）が生じるのは、異なる通訳の場でコミュニケーションの最大効果を実現しようとする「コミュニケーション促進規範」に起因する可能性が述べられ、通訳者および通訳行為を取り巻く社会的コンテキストと規範意識の関係の重要性が示唆されている。

(2) 論文の評価

本論文は、いくつかの点で評価できる。

まず通訳規範研究へのアプローチとしてオーラルヒストリーの枠組みを提案し、この枠組みに基づいて日中通訳者の語りから規範意識の形成を検討することに

より、独創性に富む研究を展開している点である。通訳という、異文化間を繋ぐコミュニケーション行為を、実践する主体である通訳者の規範意識に着目して解明を試み、その手段としてオーラルヒストリー手法を用いてデータを収集したことは、有意義な研究である。

次に、これまで十分な研究がなされてこなかった日本語—中国語間の通訳について分析したこと、特に、日本では殆ど知られていない中国における通訳翻訳研究の流れを、中国語文献を読み解いて論じた点は新たな視点での取り組みとして評価できる。

通訳翻訳研究はヨーロッパで盛んなこともあって欧米の言語を対象とする場合が多く、日本語と外国語との通訳研究についても、日本語—英語間の通訳が対象になることが大半である。そのような中、日本語—中国語間の通訳に焦点を当てたこと自体が希少であり、価値を有する。特に、中国語を母語とする通訳者をインタビューすることで、日本語を母語とする通訳者とは異なる規範意識が存在することを描き出し、かつ、それを支える中国の翻訳史から規範をめぐる言説を洗い出したことは極めて有意義である。

ただし、本論文には問題点もある。

規範意識を語りから探り出しただけに終わり、実際の通訳行為と比較検討していない点は、通訳データを収集することが極めて困難であることから理解はできるが、今後の課題として挙げておきたい。

さらに、オーラルヒストリーのデータとして集めたライフストーリー・インタビューが、「ライフストーリー」といえるまで十分に深められたものであるかどうか。インタビューする側とされる側の関係性が十分に考察されていたかどうか。同業者あるいは同僚としてインタビューすることを余儀なくされる場合、そのこと自体は調査者との間のラポール形成面で有利になりえるものの、質問が誘導的にならなかったかどうか。質的研究として有効でありながらも脆弱性も併せ持つインタビューの方法論について、今後さらなる研究課題とするべきである。

しかし、そのような課題は、本論文の真価を損ねるものではない。本論文は、熟慮された研究テーマの設定、通訳についての深い洞察、オーラルヒストリー手法を用いた点で独創的かつ希有な通訳規範研究であり、国内外における通訳学の今後の発展に大きく寄与することが期待される。